

寧本の子ホウアラしりあしん事とあふとも更
 子甲斐なりし時呼世人豪なりしと自ら顧顧
 寧寧ももしとけに後る寛寛なりしと身を知知
 しみと意とあふたふ大平の人とてそんた正正
 安安る道きハ芥飲のぬりなる道
 敷敷るしとたの

係係とて涼涼かよの月

林の仙散人

今甲斐又よつ不系投あふふ心けりはなりを存存
 今昆今昆おほ言おほ言ふしとふきあが物物

萬葉遺編

神夢歌一首兼短歌

今居たて非の在すふ在古きふね利竹の世人
 今歌人皆の悟もとるに白繼の海雲の綿の
 暖けて負味負味とて我獨せしめの深川中よ橋
 也一つとこ思ふ山川しす小幣小幣とても巨い等志
 めこれ危かりし身振立て人の世中披しつと
 事もなりかるとも海ふ吹きと吹く花に羽う羽う結結
 自物自物扱扱つとても座悪も儒者のふるまはる
 すうに唐の書とて生後後の甲斐社もけと秋田
 ある横田横田とてかむ萬葉の不滅不滅口まきせんより
 死ぬる死ぬる色一能思まハ痛かふんぬを刀にぬる

叶に卯あやまうれば陸家次男のふれ降るか
にかつた遊まうしし縁ももも願頭の昔う返す
しき言の世をまうし息の根もゆしゆもぬえ天窓
すしら首ねまふ世をまうししゆいりまありゆく風
あつてふおれまも目にいんて平屋しん世あま
る果

村肝のふゆまうししゆいりまありゆく風

甲斐りりりり

川柳五

おぼんあまの麗を相ちや

こおんやかみてハ甲斐も身ぶらま

竹の切き後らまうししゆいりまありゆく風
ゆだりし七さるる利をまうししゆいりまありゆく風
はらびハ僧もも存まうししゆいりまありゆく風
ゆりくの永き旅ひも旅して全長は極くまき居細の
今むくくまうししゆいりまありゆく風
おんむくくまうししゆいりまありゆく風